

第30集 2008 親子で学ぶ平和学習資料

# 私の戦争体験

おじいさんやおばあさんが体験した

大切な大切なお話の数々



## 目次

P2~5 巻頭言「井筒監督講演会抜粋」

P6 引き揚げる途中で… [瀬川 瑞子]

P7 一枚の家族写真 [宮野 麗子]

P8 残ったのは焼け野原 [守居 喜久子]

P9 地獄だと思った [土井 宣夫]

P10 我が生涯に忘れえぬ思い出 [西村 安次郎]

P12 義足ぐらしの回顧 [玉置 幸孝]

P13 母との思い出 [佐伯 陽子]

P14 涙の中に写った月 [西端 信枝]

## 引き揚げる途中で……飢えの中の命

堺市

瀬川 瑞子 (70歳)

私が終戦を迎えたのは満州（現在の中国東北部）です。大陸の大自然の中で楽しく幸せな生活でした。満州は、私が7歳まで過ごした生まれ故郷です。

昭和20（1945）年、日本は大東亜戦争（※①）で負けました。その時を境に、生活すべてが天と地ほど変わってしまった中で九死に一生を得た私ですが、古希（※②）を迎えた今も忘れることのできない戦争体験です。

満州が日本の領土ではなくなりましたので、内地（日本）へ向けて引き揚げるときがきました。何か月もかけての移動は、誰もが死と隣り合わせの地獄そのものでした。鉄道が走る地点まではひたすら歩く以外に方法がありません。太陽があるうちに少しでも進まなければ、夜になると野生の狼に襲われる危険があるため必死で歩きました。すでに無人になった民家や家畜小屋に泊まったり、持ち主のない畑の大根などを生で食べたり、捕まえた蛙を焚き火で焼いて食べた記憶があります。体力のない子どもにとっては悲惨というほかありません。

空腹とどの渴きの中で、友だちのN子ちゃんが動けなくなっただけでそのままだけで死んでしまいました。移動を続ける道端には行き倒れの遺体も見られました。特に忘れられない場面は、生きておられるのではと見間違えるほど、きちっと帽子をかぶり、ゲートル（※③）を巻いた兵隊さんが、岩にもたれて座ったままで亡くなっておられた姿です。誰もが明日は我が身という思いから無言で通りすぎた悲しい記憶です。体力にも限界を感じ始めたころ、父の知人（中国人）を頼って鉄道に近い村に辿り着きました。親切に漁業用の倉庫を宿舍として使わせてくださいました。雨風が凌げて空腹を満たせば、それ以上を望むことは贅沢だとわかっていても、食べるものはコーリヤン（家畜のエサのような穀類）のおにぎりや粟のお粥でした。栄養失調が回復するはずもなく、昨日ひとり今日またひとりと命が失われました。家族では母が熱を出して起きられなくなりました。父がすぐにはり治療のできる人を探して連れてきて運よく熱は下がりましたが、母乳が出なくなっただけで弟が亡くなりました。その時「おもゆを作る米をなんとか探してほしい」とすがる母に「わが子だけ特別扱いはできない」



※③ゲートル  
厚地の木綿で脛（すね）を包む服装品。

※②古希  
70歳の呼び方。

※①大東亜戦争  
第二次世界大戦に対する当時の日本側の呼称。第二次世界大戦のうち、主として東南アジア、太平洋方面における日本と米国、英国、オランダ、中国などの連合軍との戦争。

といていた父が、私のために必死で栄養のあるものを調達してくれた様子を大人になってから母の思い出話で知りました。自力で動けなくなった私は死ぬ順番が来たのだと思ひ込んで「目をつむっていたら死ぬのかな」と考えて眠っていた日を思い出します。子の世代にも孫の世代にも、そして永遠に戦争が起きませんようにと願っています。

## 一枚の家族写真

東大阪市

宮野 麗子

(77歳)

奇跡的に助かった一枚の写真。長兄が帰阪したので空襲(※①)の前日に、両親、長兄海軍将校、次兄陸軍下士官、三男葉学学生、私女学生の家族写真を撮った。幸い写真館が焼けなかった。現在私の唯一の宝として残っている。

昭和20年3月13日夜から14日未明にかけて大阪は空襲を受けた。当時私は14歳、出兵していた長兄が「少し休暇をもらったから」と帰って来た。私は喜んだが、さすが母は気付いていた様だった。「出兵先の呉に行けばもう二度と帰って来られないかもしれない」と。その日はヤミ市(物々交換)で材料を工面して、久々のスキヤキをしました。覚悟の上の帰郷最後の晩餐です。外に匂いがばれないように、灯火管制(※②)で部屋一面黒布で覆われた中…そして眠りについた頃、あのB29(※③)の飛行機がやってきたのです。今でもビューという音が忘れられません。

私は当時、大阪四天王寺付近に住んでいた。焼夷弾(※④)が西門あたりにダーダーと落下。西門交差点を覆い隠す程の炎の塊がわが家に向かってドッドと押し寄せて来ます。四天王寺の五重塔(国家遺産)が焼け、50センチ角のからけし(※⑤)が庭に降りそそぐのです。近くの防空壕(※⑥)へと避難しました。兄は「こんな所にいると焼け死ぬぞ!」と叫び、裏の小学校近くの墓地へと先導してくれました。その兄の助言のお陰で命が助かった。防空壕内で死んだ人、路上で炎にあおられて焼け死んだ人がいたのです。ひと時ほどお墓で待機し、焼け残りの炎の中、側の蔵がボンと爆発し火柱が立つ。焼けた電線を踏まないようつま先歩きで、兄の先導のもと天王寺美術館へと逃げ延びた。母は兄のサーベル(※⑦)と所持品を大切に持

### ※①空襲

航空機から機関砲・爆弾・焼夷弾・ミサイルなどで地上の目標を襲撃すること。

### ※②灯火管制

夜間、敵機の来襲に備え、減光・遮光・消灯をすること。

### ※③B29爆撃機

長距離爆撃用に開発された米軍の大型爆撃機。無差別じゅうたん爆撃で日本の多くの都市を焼け野原にし、広島と長崎には原爆を投下した。

### ※④焼夷弾

火災や高熱によって人や建造物などを殺傷・破壊する爆弾・砲弾。

### ※⑤からけし

木が燃えて黒くなつたのを見計らってこれを取り出して、水につけるか、壺のような入れ物に入れて空気を遮断すると、柔らかい炭状のものができる。「からけし」あるいは熾き(おき)と呼んでいたが、簡単に火がつくので重宝した。

### ※⑥防空壕

空襲の際に避退するため、掘って作った穴や建造物。

ち、他は何一つ持つてこなかった。ただ兄を明朝6時に帰さねばとの思いが強かった。兄は帰還当日にわが家が全焼し残された家族がどのようになるのか見届けられないことや、自分の真相も打ち明けられないもどかしさがあったと思う、辛い別れとなった。

やっとの思いで天王寺美術館に着くと、「おかあちゃん」「○○ちゃん」と言う叫び声がそこいらで響いていた。あの悲壮な叫び声は今も耳につく。そして近くの天王寺動物園からの「ウー」といううめき声、毒殺(※⑧)されていなかった動物たちの苦しそうな声、私はそのうめき声とはぐれた人たちの叫び声が重なり合って、恐ろしくずっと耳をふさいでいた。何とも言いようのない悲しみと恐ろしさ。兄は後ろ髪を引かれる思いで旅立って行った。母が炎の中から大切に預かったサーベルと所持品を渡して……。

母も私もひと言も言えない。目を真っ赤にして手を握り合った。戦争は否応なしに家族を引き離していく。母は死にゆくわが子をただ呆然と無言のまま見送った。長兄と次兄は学徒出陣(※⑨)で兵役にお国に捧げた子……。あとに残された三男と私をどうしても助けたいと我が身にかえて護ってくれたのだった。

一枚の家族の写真が当時を語ってくれている。現在、戦争を知らない子どもたち、孫たち、平和なればこそ、日々の生活の中に笑いがある。この奇跡的に残った家族写真の中には心からの笑みがなかった……。

## 残ったのは焼け野原

松原市 守居 喜久子(78歳)

女学校の2年の時だったと思います。

家から直接、堺福助工場へと行き、制服の上から縞のエプロンを着て腕のところに学徒勤労動員(※①)と付けて工場で働いていました。昼食にはコウリヤン(※②)、麦、外米が出ました。その時私は百姓生まれで、大きい箱に芋をぎっしり詰めて友だちにあげました。友だちの母は涙を流して喜んだと友だちが言いました。薄い手ぬぐいを持ってきて米一升と交換してと言う家には、父は「可愛そうに」と言って、「手ぬぐいなんかいらん、芋持てるだけかば

※⑦サーベル  
軍人や警官が腰に下げた西洋風の刀剣。



※⑧毒殺  
毒をもつて、殺すこと。

—毒殺をしなければならなかった理由—  
戦時中、空襲で施設が破壊され猛獣が町に逃げ出すのを防止するため、餌の配給が困難となったため、日本中の動物園に毒殺・射殺の通達がでた。

※⑨学徒出陣

1943(昭和18)年、それまで兵役を免除されていた大学・高等学校・専門学校の学生たちも戦場に狩り出されることになった。特攻隊員になって敵に体当たりしたり、前線に向かう途中に船ごと沈められたり、またあるいは病気に倒れたり、その多くが再び母の顔を見ることはなかった。

※①学徒勤労動員

男子学生は戦場へと狩り出され、女子学生や低学年の男子生徒は軍需工場などの生産現場で働かされた。

※②コウリヤン

イネ科の一年草。熱帯アフリカ原産。耐干性に強く多収。世界の温帯・熱帯に広く栽培される重要な穀類。穀実を食用とし、また飼料に用いる。

んに入れたらいい」と言ってあげたこともありました。また、リュックサックいっぱいにしてもらうとふらふらして、それでも少しでも母が喜べばと、家族が助かると言って手に持ち帰る姿を今も思い出します。

作業中に警戒警報（※③）が鳴るとただちに帰宅の用意。下はもちろんモンペ、頭には防空頭巾（※④）。バスもなく自宅まで歩き、疲れてのどが渴いて池の水を飲んだこともありました。夜はまたサイレン鳴って防空壕の中で過ごしたこともたびたびあり、日々この繰り返しでした。空には、敵機の飛来も毎日のようになり、大阪の空襲もあり艦載機（※⑤）も飛び、日々が何べんもあり生きている心地がしませんでした。私の目の前で艦載機が飛び、人の姿を見ると空の上から爆弾を落とす有様。お風呂もゆっくり入ることもできず、5日に一回ぐらいの日々を過ごしました。

大阪も焼け野原になり堺の福助工場も焼けて、朝いつものとおり働きに行くときだけが残って燃えていました。それに比べて現在の生活のことを考えると今の若い人は幸福です。口で言うてもわからないけど、もっともっと親あつての自分やから親を大切にするといい気持ちを持って、日々感謝の心で暮らしてほしいと思います。

## 地獄だと思った

大阪狭山市 土井 宣夫（86歳）

昭和18年4月、船団27隻が門司港を出航した。それぞれの貨物船に兵員が満載されている。私の乗った船は、貨物船辰春丸7千トン。乗員は軍雇要員（※①）32名。見習い看護婦26名、医師3名。それに赴任先はそれぞれ違うが、見習士官11名が便乗。船団は、日本を離れた。距離間隔を保って目的地シンガポールに向かって行く。

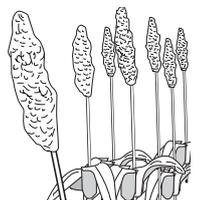
もう、周囲を見渡しても陸地は見えない。大海原に出たわけである。辰春丸の船倉には爆弾と南瓜がギッシリ積み込まれている。軍人の我々が2名あてられ日替わり当番で警戒に付く。日中の暑さが日増しに厳しくなる。だいぶ、南に下がったようだ。

夜、それぞれが涼を求めて甲板に出、星を眺めながら故郷の話やら家族の話をする。

※③警戒警報  
敵機の来襲が予想される場合などに出された警報。

※④防空頭巾  
空襲に備えてかぶる頭巾。

※⑤艦載機  
戦艦・巡洋艦などに積載し、カタパルトによって発艦する航空機。



※①軍雇要員  
軍隊が徴用した作業員。

5日目の夜。いつものように甲板で寝ていたが、早朝、突然あちこちで爆発音が聞こえた。驚いて飛び起きて周囲を見渡すと船団のあちこちから火の手が上がっている。軍装備に着替えて、再び甲板に上がる。周りは火の海だ。敵潜水艦(※②)にやられたのだ。こんなところで死んでたまるか：護衛の駆逐艦(※③)1隻が、燃える船の間を狂ったように走り回っている。と、突然、平行していた船が火柱を上げた。あつという間に沈んでいった。ありとあらゆる浮遊物にすぎりついた多くの兵士たちが助けを求めている。私達はそれに手を差し伸べることもすら出来ない。こちらも逃げるのが精一杯だ。私は、地獄だと思った。その兵士たちの眼も見た。声も聞いた。「天皇陛下万歳」という顔ではない。おそらく、「お母さん」と、言ったと思う。

それからも目的地に着くまでいろいろな事があったけど、それは省略するとして、船のベランチレーター(※④)に軍刀で刻まれた日付線は26本であった。シンガポールからあらゆる乗り物を利用し、ことに、秦麵鉄道(※⑤)を貨車に乗って約20日かけラングーンに到着、本隊に着任した時にはホッとした。休む間もなく空中勤務者として62司令部偵察機(※⑥)に搭乗。南方諸地域を転戦するのであるが、終戦後、ジャングルと鉄条網の中で約2年間過ごし、鹿児島に無事帰着した。

私の戦争体験は想像に絶するものがある。目下、毎日夜中にその記録を書き綴っているが原稿用紙500枚は超すだろうと思う……。

## 我が生涯に忘れえぬ思い出

西村 安次郎

昭和18年7月召集令状(※①)が届き、数日にして妻子を残し大阪三十七艦隊に入隊。5〜6日にして満州国間島省延吉 満州第四〇一九部隊に入隊、軍隊生活。2年間に派遣や出張が幾度もあり公主嶺をはじめ石泉、興城、四平、他にも数箇所に行き、敦化にて終戦となった。ソ連軍にすべての武器を取られてしまい、さてそれからは何もすることもなく約一カ月は兵舎でゴロゴロしていた。ソ連軍より日本に帰してやると通告。上官をはじめ我々も嘘とは知

※②潜水艦

潜水して敵に接近し、魚雷などによる攻撃を行う艦船。

※③駆逐艦

砲・魚雷などを主要兵器とし、敵の主力艦・潜水艦・航空機の撃破を任務とする小型の快速艦。

※④ベランチレーター

通風気。送風機。換気装置。

※⑤秦麵鉄道

秦麵はタイとビルマ現ミャンマー。日本軍がタイのノンブラドックとビルマのタンピサヤとの間に強引に敷設した鉄道。連合国軍捕虜1万3千人、アジア人労働者数万人が酷使によって死亡。

※⑥62司令部偵察機

キ―六十二司令部偵察機。双発プロペラ機。当時の戦闘機に劣らない性能を有していた。

※①召集令状

明治以来、日本の男子にはすべて兵役の義務が課され、20歳で「徴兵適齢」となり「徴兵検査」を受けなければならなかった。そして召集令状が届いたら、いやおうなく軍務に服さなければならなかった。

らず昭和20年10月1日、貨車に乗せられ30日間かかって着いた所がシベリアであった。着いた第8收容所(※②)(ラーゲル)で1カ月働いたら日本に帰すと騙され、また1カ月過ぎるとトラックにて次の場所に連れて行き働かす。そしてだんだん山奥に連れて行き働かす。ソ連軍ほど腹の黒い人種はない。仕事がだんだん残酷な日が続く。しかし食事は一日に2回、356グラムのパンとスープだけ。着るものも金もなし、仕事は内地の土方でも音をあげる厳しい作業。山の木の根を掘る道具もなく無理な道路を作る。山の大きな木は内地の氷屋さんが使っている大きなノコギリで二人がかりで切る。伐採をする、または土を運んで鉄道の土盤を造るといった仕事もあった。現場に行くにもソ連兵が後から銃を向けてつれてゆき一寸の隙もない。シベリアは夏の日が少ない。長い零下のつらい寒さの日が続くが零下30度を超えなければ仕事は休ませてくれない。正月も2度越したが仕事は休みなし。ただしメーデー(5月1日)だけがさすがに(赤旗の国)休みです。平地の收容所は丸太棒を組み合わせた家であるが、寝るところに毛布は一枚もなし。着のみ着のまま枯れ草を敷き布団の代用にする。山で仕事をするときは、家がないので我々の手で木の枝を代用し家造った。屋根や壁は草を束ねて雨のときは外で寝ると同じで、ずぶぬれである。トンド(※③)して乾かすがすぐ濡れる。こんな情けないことはない。毎日の食事が少ないので腹のふくれた日がない、畑にはにど芋(※④)があるので盗みにゆくがそれが命がけ。ソ連の百姓は銃を持って見張っているので何人もの日本兵が射殺された。

いろいろなことがあって、ソ連に勾留されて2年が過ぎた。身体検査で甲・乙・丙(※⑤)に分けられる時、第六感で丙の中に入らなければと思ったのが幸を生じた。丙の者が日本に帰れるとの噂が出てから早速トラックに乗せられて貨車のあるところに連れてこられた。駅という駅などない。また貨車に乗せられ10日間揺られ着いたところで海が見えた。これがナホトカであった。今度こそ本当に内地に帰れる！何度も何度も騙され続けたがこれで妻子の顔が見られると思うと嬉し涙が止まらない。ナホトカに着いてからも迎えるまで仕事をさせられた。とうとう迎えるの船が来た。港に行くと言組員が日本人であった。乗船して船員さんに内地の様子を聞いた。

数日にして舞鶴港に着いた。市の職員の方が出迎えに来てくれた。「兵隊さんはほんとに長い間ご苦労様でした。ここは皆様の国、舞鶴です。力強く上陸の第一歩を踏みしめてください」

※②收容所  
囚人・捕虜・難民などを收容する施設。

※③内地  
国の領土で、新領土または島地以外の地。挑戦・台湾・樺太(サハリン)などを除いた領地を指した。

※④トンド  
焚き火。

※⑤にど芋  
じゃがいものこと。

※⑥甲・乙・丙  
徴兵検査の際、より身体強健と観察された者から順につけられた判定。「甲種合格」。

とは言われたが、身体が弱っているのであまり強く踏みあがることができなかつたが、自由な身になれたことに感謝。お湯に入れてもらい、新しい服も着させてもらった。舞鶴収容所を3日間でそれぞれ皆、故郷に帰る。難波駅に着いたが気が焦り足が動かない、なんとかたどり着いた家では皆びっくりして大騒動。泣くやら笑うやら……

今思い出してもぞつとする。今は幸せで子どもがいる、孫がいる。そしてひ孫もいる、人生は山あり谷あり楽しい家族あり。

## 義足ぐらしの回顧

堺市

玉置

幸孝（88歳）

私は昭和18年10月、2度目の召集で大阪の淀部隊に入隊、同月広島島の宇品港で乗船し11隻の船団で南方方面に出征した。

出航して2日だったか、関釜連絡船が撃沈されたという思わぬニュースに船内は騒然、全員に救命胴衣の装着が命ぜられ兵器にも浮きをつけるといふ事態に、本土近海もすでに危険が近づいているのを感じたものだった。

船内では連日退避訓練が行われ、台湾海峡に入ったある夜中、私たちの乗船が米軍潜水艦に撃沈され、5時間ばかり海中を漂流。もう少しで土左衛門（※①）になるところを海軍の船に救助され、その日の午後、台湾の高雄湾へ入ったが、港の周辺にマストや煙突を水面に突き出した沈船の多いのにも驚いた。高雄では厩舎が宿舎になっていた。簡易兵舎があったが海軍の兵士で満員。聞くと方々の海戦で乗艦が沈められたのだという。その後、兵器や装具の補充をうけ、次の船でシンガポールへ着くとそこも沈船だらけ。港内施設も空爆があったとかで煙をあげていた。その後、別仕立ての船でスマトラに向かい、バレンバン（※②）に上がってやっと船旅の恐怖から解放された気分だった。

スマトラ（※③）は当時オランダの植民地だったが、日本が石油を求めて占領したところで、交戦が終わった後だったのは幸運だった。駐留中オランダ軍の兵舎や捕獲のトラックを使った。将校宿舎では初めて電気冷蔵庫や洗濯機を見た。トラックも日本製より優秀で、オ

### ※①土左衛門

溺死者の死体。江戸時代の力士、成瀬川土左衛門の身体が肥大であったので、おぼれ死んだ人の膨れ上がった様子をさして言うようになった。

### ※②バレンバン

インドネシア、スマトラ島南東部の都市。ゴム・石油の集散地で、大精油所がある。

### ※③スマトラ

東南アジア、大スンダ列島の北西端にある島。

ランダ兵捕虜(※④)の前で気恥ずかしい感じがしたものだ。た。

その後、ビルマ(ミャンマー)戦線支援の新任務を受けシンガポール経由で20年4月タイ国へ入った。タイの宿营地へ着いたその日、米軍機が上空からビラを撒いた。そのビラに「淀部隊の諸君、長途ご苦労、諸君は軍閥(※⑤)に騙されている。これ以上戦争を続けても無益なこと、一日も早く郷里へ帰り給え」とあり、裏面に母子と富士山の絵が描いてあった。そんな不気味なビラのあと、沖繩に米軍が上陸したという驚きのニュースが入った。部隊の動向が逐一察知されているらしい不安に加え、沖繩の情報は敗戦を確実にしているように思えたものだった。だがそれでも命令どおりビルマへ行くという……。

部隊はメナム河を曳船で北上し、後は汽車でチェンマイに入りそこからビルマを目指すという。ところがその汽車がメーモという駅を通過の夜、ゲリラによって列車が転覆、私はその惨事で片足切断の重症で野戦病院(※⑥)に入った。20年6月だった。本隊はそのままビルマ国境まで侵攻したがそこで終戦。私はバンコクの陸軍病院に移され21年6月復員(※⑦)したのである。私は復員後もすぐ郷里には帰れず、義足を作るために10カ月近くも入院していたが、その間戦争の無法と不当さ、それを国民に押しつけてきた天皇制軍隊の横暴と無謀さをつくづく思ったものである。

## 母との思い出

東大阪市

佐伯 陽子 (67歳)

父が出征(※①)していた時、私は5歳でした。昭和19年から20年の頃です。母は私と私のすぐ下の4歳の双子の弟、それに2歳の妹をつれて疎開(※②)しました。兵庫県の猪名川町というすごい田舎です。母の姉の嫁ぎ先でお寺なので、いろんな家族が疎開していました。伯母の家にお世話になっている手前、母はよく心配りしてよく働いていました。お風呂は井戸のつるべで水を汲み、バケツで何度も運ぶのです。トイレの後始末も大きな杓でタンゴ(※③)に入れて肩に担いで裏の畑に捨てに行きます。おばさんに「今夜すき焼きにしようか」と言われれば、母が庭にいるにわとりを一人で料理するのです。背中には二歳の妹をおんぶして日本

※④捕虜  
敵に捕らえられた者。

※⑤軍閥

旧憲法のもと、内閣・議会から独立して強大な地位を保持、大日本帝国の侵略政策を推進、国政を左右した後、敗戦によつて崩壊。  
旧憲法のもとで統帥権を盾に国政を左右した軍政集団。

※⑥野戦病院

戦場の後方に医療施設を設け、戦線の傷病兵を収容・治療する施設。

※⑦復員

戦時の体制にある軍隊を平時の体制に戻し、兵員の招集を解くこと。動員の反対。

※①出征

軍隊の一員として戦地に行くこと。

※②疎開

空襲・火災などの被害を少なくするため、集中している人口や建造物を分散すること。

タオルを姉さんかぶりにしてよく働いていました。当時は母28歳の若さでした。私も小さいけれど母の手助けをよくしました。双子の弟の面倒を見るのも私の仕事でした。

ある日、母がダンスの中から美しい着物を出してきて、しばらく眺めていましたが、それを風呂敷に包んで出かけていきました。しばらくすると風呂敷の中に大豆やお米や食料品を入れて帰ってきました。そんな日が時々ありました。またある日、みんなで買物に行きました。その途中にサツマイモ畑がありました。母は「あの小さな芋とってきや」と私を畑の中へ放り投げました。そこにはよく見ると今掘ったばかりの芋畑のツルの先に小さなサツマイモが採り残されていました。私は急いで小さな芋をちぎり採り弟たちと生のまま食べました。とてもおいしかったです。本堂の方から美しい音楽が流れてきました。隣室の女の子（7歳）が踊りを習っていました。美しい浴衣を着て綺麗な絵日傘（※④）を持って「野崎参り」や「テルテル坊主」など蓄音機（※⑤）からながれる音楽にすごく嬉しそうに踊っていました。私も女の子です。とても羨ましく思いました。ある夜、蚊帳（※⑥）を吊って親子5人で寝ていたら双子の一人が高熱を出して苦しみました。母と私で一生涯懸命に看病しましたが、父がいない私たちには何にもしてやれないまま、弟は悲しく亡くなってしまいました。その上にもう一人の弟も10日ほどして亡くなりました。今思えばそのときの母の気持ちはどんなに辛かったことだろうと思います。私も弟とよく遊んでいたのも悲しかったのです。「姉ちゃん、歌覚えたよ」赤い血潮の予科練（※⑦）のななちゆうボタンがと大きな目をクリクリして歌っていた姿が今も目に浮かんできます。弟たちは伝染病を隣室の女の子からうつされたそうです。女の子は大阪の大きな病院に入院し元氣になりました。運命とはいえない気持ちでした。その後、父が無事生還してきました。母は最高に嬉しかったと思います。その後、私たちは大阪へ引越し、2年後に待望の男の子が生まれ、その男の子が成人し、教師になり、同じ職の人を嫁にもらって両親を看取ってくれました。戦争は二度とないように！と願っています。

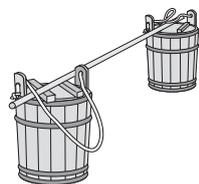
## 涙の中に写った月

松原市

西端

信枝（74歳）

※③タンゴ  
肥桶。糞尿（ふんによう）を運ぶ桶。



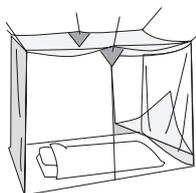
※④絵日傘  
模様の付いた日傘。



※⑤蓄音機  
音波を記憶したレコード盤から音を再生させる装置。



※⑥蚊帳  
蚊を防ぐために吊り下げて寝床をおおうもの。麻布・絹（ろ）・木綿などで作る。



※⑦予科練  
海軍飛行予科練習生の略称。

大きくて、真ん丸で真っ白の月。今も暎の奥に焼きついている。

戦争も激しさを増してきた昭和20年1月6日の夜、国鉄片町線（現JR東西線）片町駅だった。当時の都会の子どもは、学校ぐるみの集団疎開か親類などを頼っての縁故疎開（※①）で田舎に移っていた。集団疎開は、何人かの先生に付き添われ、お寺などで寝泊りし勉強していた。乏しい食事、1カ月に数度の入浴、訪ねてくれる家族を待ちわびる生活。家族は子どものためにと耐えなしの食物を持って来て、その食べる姿を見て帰る。どんなに悲しかったことか。今度いつ会えるのだろう。ひよっとしたら……。

一方、縁故疎開をした私は、叔父のところ（現大東市）とはいえ子ども心にも遠慮しての生活だった。学校では都会の子はお粥ばかり食べてると、疎開をもじって「おかい」とからかわれ泣いたことも。そんな中での楽しみは土曜日午前の授業を終えると、すぐに大阪本町の家に帰る。電車の窓に大阪城の天守閣がだんだん大きくなってくる。お母ちゃんのことへ帰るねん。ワクワクしたものだ。

そんな生活が3カ月続いた20年正月。冬休みを家で過ごし叔父の家に戻る時間がくるのに立ち上がらない私を、姉が片町駅まで送ってくれることになった。駅に着いた私はここでも動かず、ついには泣き出す始末、涙にかすんだ目に飛び込んだのが冒頭の月だった。

本土空襲も激しくなり、電車が止まることも多く、叔父たちは炒り大豆を食べながら歩いている。帰宅も増え、危ないから家に帰してもらえなくなった。そして3月14日未明、私の家は炎に消えた。その日は朝から雨、燃え殻を含んだ、黒い雨だった。雨に濡れ布団を被った母と姉が到着したのはどんなにうれしかったことか。夜が明けた大阪の町は焦土と化し川には死体が浮かび、道には焼け焦げた死体が転がり、昨日まで人が生活していた所とは思えない恐ろしい有様だったという。

1年生の12月から3年8カ月にわたる戦争は終わった。……が、住む家がない食べ物はない、着るものがない。やっと大阪での生活の目処がたち祖母の所でもらった卓袱台をもった母と降り立った天王寺駅には、進駐軍（※②）の兵隊の腕にぶら下がっている女性たち。その光景は当時の子どもには理解できるものではなかった。繰り返してはいけぬ戦争、子どもたちにあんな惨めな思いをさせる戦争。戦後60年余り、記憶から記録になろうとしている今、今こそ私たちが語らなければと思う。「戦争はイヤだ！ いけない！」と。

#### ※①縁故疎開

血縁・姻戚などの縁続きや知人・などのつてを頼りに疎開すること。

#### ※②進駐軍

日本の敗戦により、占領し軍政を敷くために駐屯した連合国側の軍隊。